

# バルザック『村の司祭』の植物

博多 かおる

## 序

「探偵小説であり宗教小説〔中略〕、人を取り巻く自然と心の深い層をめぐる冒険」を書く、「『人間喜劇』でも、もっとも豊かで複雑な小説」とアンドレ・ロランが形容した<sup>1</sup>『村の司祭』は、1839年に『ラ・プレス』紙に連載された時と、1841年にスーヴラン社から二冊本で刊行された時ではかなり姿を変えていた。1839年版では、愛のために罪を犯した若者が断頭台の露と消える前に、寒村の司祭が彼を信仰に引き戻すことに焦点が当たっており、小説の題名も妥当だった。しかし1841年版では、死刑となった若者の愛人かつ共犯である主人公ヴェロニックらによる貧しい土地の開拓が詳しく語られ、政治的・社会的考察も追加されて小説の主題は複雑化した。庶民の出身だが銀行家の妻となったヴェロニックと、その父の工場で働いていた若者タシュロン<sup>2</sup>の逃避行の計画が生んだ不幸な殺人事件をめぐる探偵小説的な側面は、末尾でヴェロニックが人々の前で行う驚くべき告白へと最終的に到達する。タシュロンの墓がある不毛の地モンテニャックを一種のユートピアに変貌させる事業は、そこに宗教的な視野を授けるボネ司祭、事業に必要な資金を投入するヴェロニック、近代的土木技術に精通した技師ジェラルムらによって組織的に行われ、土地を変革することの宗教的・政治的・心理的・技術的射程もより詳しく探られた。結果、タシュロンが金を盗みに入り誤って犯した殺人の共犯を探す推理は、土地の不毛の原因を探り、人間と自然と科学の力を合わせて風景を変えていく探求と、小説の心理の深い層で絡み合うこととなった。

本稿はこの多面的な小説を、推理のプロセスにも、土地の再生や登場人物の心理にも結びついている植物に着目して再読していく。貧しい村をユートピアに変える事業は、「わたしたちの魂は土地と同じように耕されなければ

---

<sup>1</sup> André Lorant, « Introduction » du *Curé de village*, dans *La Comédie humaine*, dir. Pierre-Georges Castex, Gallimard, coll. « Pléiade », t. IX, 1978, p. 605.

ならない<sup>2</sup>」というキリスト教的な思想と切り離せない。だがそこには植物をめぐる感性の変化や、死と再生をめぐる多様な思考、他のテキストの記憶も絡みついている。ヨースト・メンテンスが指摘しているように「休閒地、不毛な平野、野生の状態の自然、犯罪率の間に緊密な関係を見る<sup>3</sup>」、19世紀の環境・犯罪心理学につながる思想もこの土地改革を支えている。『ポールとヴィルジニー』と本作の重なりから炙り出される植物の皮肉な役割に触れた後、木や草が小説の探る死と再生の主題といかに結びついてそれを展開させ、小説の仕組みと結びついて詩情を醸し出し、その連なりを支えているか明らかにしたい。

## 1. 熱帯の花とポプラの影

『村の司祭』と『ポールとヴィルジニー』の関係についてはすでに多くのことが語られてきた。『村の司祭』のリモージュで「子供っぽく、無垢で、純粋な<sup>4</sup>」作品との評判をとっていた『ポールとヴィルジニー』という小説が、思春期の少女ヴェロニックに「みだらな小説よりひどい<sup>5</sup>」影響を与えてその第六感を呼び覚まし、恋への憧れを抱かせ、しまいには不貞の恋へと駆り立てて殺人の共犯にまでする。その時点で『村の司祭』はすでに過激なものをはらんでいたと思われる。本稿の主題にもとづいてこの二作品の関係性に注目するなら、さらにいくつかの興味深い点が浮かび上がってくるだろう。

『ポールとヴィルジニー』を読んだヴェロニックは野卑なものを嫌悪する自分の性質に気づき、置かれている環境を超えた物語を自ら編んでいく必要性を漠然と感じる。身近な職人の男の一人を貴族のように見立て、自分の登った高い地位まで引き上げる妄想を抱いただろうと語り手は推察する。この推察は、タシュロンとの恋物語の芽が、ヴィルジニーがフランスへ送られた後、立場や境遇の違いが葛藤を生む『ポールとヴィルジニー』の恋を母胎として芽生えた可能性を補強している。そこへ現れた求婚者、醜く現実的な銀行家グラランに対し、ヴェロニックは激しい嫌悪感を抱く。ところが彼から贈られた花束がその感覚を鈍らせる。部屋に広がった花の香りを嗅ぐと、「ヴェロニックはグラランをはじめて見た時に感じた感情とはまったく反対の感

---

<sup>2</sup> Balzac, *Le Curé de village*, op. cit., p. 763.

<sup>3</sup> Joost Mertens, « Ingénieur de village », *L'Année balzacienne*, 2017/1 (n° 18), Presses Universitaires de France, p. 417.

<sup>4</sup> Balzac, *Le Curé de village*, op. cit., p. 654.

<sup>5</sup> *Ibid.*

情を抱き、熱帯の自然が与える幻想的な理想の世界に浸ってしまった。今まで彼女は白樺を見たことがなく、アルプスのエニシダや、レモン草や、アゾレス諸島のジャスミンや、麝香バラなど、優しい感情を誘い、芳香の歌を心に歌いかけるああした素晴らしい匂いを嗅いだことがなかったのだ<sup>6</sup>。ヴェロニックの判断を狂わせ恋に誘うのは遠い場所の植物、エグゾティックな花の香りだ。『ポールとヴィルジニー』でポールは耕地の周りにレモン、オレンジ、タマリンド、蕃荔枝<sup>ベンレイシ</sup>など香りを持つ木を育て、主人公二人が生まれた時に植えられたココヤシの木の周りではバルサム草が甘い香りを、バジリコがクローヴのような香りを放っていた。書物に描かれた花の香りと実際に嗅ぐ花の匂いは混じり合って「優しい感情を誘うもの (*excitant de la tendresse*) 」としての効果を倍増させる。ヴェロニックの隠された欲望の原点となる書物を知りもせずに、銀行家グラランは彼女の持参金に惹かれ、その書物から取り出したかのような花々を手にと彼女のもとを訪れる。つまりヴェロニックの心理の奥に刻まれたエグゾティックな島の自然と花々を彷彿とさせる香りを温室から持ち出し、自分は読んだこともない物語を通して、自分は知ることのないヴェロニックの愛の陶醉への希求を育んだのである。

『ポールとヴィルジニー』の物語に魅せられたヴェロニックは、リモージュを流れるヴィエンヌ川に浮かぶ島を「フランス島」と名づけていた。これはポールとヴィルジニーが暮らした島（現在のモーリシャス島）の名前に由来する。「ヴェロニックの想いはそこにあらゆる若い女性が自分のために構築し、それぞれの美点で豊かにする空想の世界を住まわせた<sup>7</sup>」。その島は彼女の妄想と欲望を匿う巣のような場、同時にそれを育てる触媒となるのだ。

小説の探偵小説的な側面においては、「フランス島」の木の影が犯罪現場に達している光景が真実発見のきっかけとなる点に注目したい。タシュロン事件が残した最大の謎と関心の一つは、盗まれたパングレ爺さんの金がどこに埋まっているかという点だった。この一見単純な疑問は、バルザックの小説の考古学的側面、埋もれた物事を明るみに出す試み、そして不当に奪われたものを返却し (*restituer*) 、物語を再構成する (*restituer*) 行為とつながっていて、この小説では隠されたものを覆う水と証拠隠滅に使われる火が独特な詩情を添えている。謎解きの鍵となるのは島のポプラの木の影の長さだ。

---

<sup>6</sup> *Ibid.*, p. 662.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p. 654-655.

島には種々の木やポプラが生い茂っていた。夕日が西から指す時間に、司教の目は無意識的に川の右岸に注がれていた。島の大きなポプラの木の影が、フォーブール・サンテティエンヌの側で、パングレ爺さんと女中の二重殺人が行われた葡萄畑の塀に達している箇所だった<sup>8</sup>。

風景が秘密を暴く際、ある正確な時刻に、夕日と木が共謀して場所の関係性を指し示す。高台にある司教館のテラスにいたりモージュの司教は、光が木に触れてできた影が指し示す島と殺人現場のつながりを理解し、その間の水の下に金が埋まっていることを見抜いた。教会での瞑想の習慣が授ける慧眼が生んだとされるこの発見の成果は、検察や警察に共有されることはない。

『ポールとヴィルジニー』では、兄妹のように純真な恋人たちの生活が「木の影の長さで時間を知り、木に花や実がつく時期で四季を知る<sup>9</sup>」ものとして描かれていた。この指摘は、二人の生活が草木と深く結ばれ、富や俗世の知を必要としないものであることを示唆し、アダムとイヴが罪を知る前の楽園を彷彿とさせる無垢な自然との幸福な関係が恋の性質を定義していたことを告げている。ところが『村の司祭』で、木の影の長さは犯罪現場と盗品の隠し場所の関係を語り、ひいては罪深いものとなった恋のいきさつを示唆している。木は、『ポールとヴィルジニー』のテキストがヴェロニックにとって誘惑の言葉となってからの物語を見守った末、失われた楽園の残骸を影で覆っているのだ。

島の位置についてバルザックがさまざまな計算を巡らせたことがニコル・モゼの論考から察せられる<sup>10</sup>。樹木が秘密を守り、また語るためには、正確に配置された場所と光、木、水の緊密な協力が必要だった。すべてを推理し尽くした読者には理解できることに、タシュロンは泳いでリモージュのフォーブール・サンテティエンヌの側の岸とフランス島の間を渡った。バルザックが初期小説の『ステニー』から『村の司祭』まで、『グランド・ブルテージュ』も含め、泳ぎのうまい男を登場させ、ポプラがたくさん植わった島を描いているとニコル・モゼは指摘している。その点を考えるなら、『村の司祭』の地理は『ポールとヴィルジニー』の記憶のみならず、バルザックの初期小説から引き継がれた恋する登場人物の命をかけた水との関係、樹木の中に謎を匿う島のイメージの上に形成されていると言えるだろう。

---

<sup>8</sup> *Ibid.*, p. 700.

<sup>9</sup> Bernardin de Saint-Pierre, *Paul et Virginie*, Garnier frères, 1964, p. 129.

<sup>10</sup> Nicole Mozet, *La Ville de province dans l'œuvre de Balzac*, CDU et CEDES réunis, 1982, p. 203-204.

そこに関わる木はなぜポプラなのか。ありふれた木であり『人間喜劇』にもしばしば登場するポプラについてそのような問いは不適切かもしれないが、ポプラは後にタシュロンの実家があったモンテニャックの不毛な土地を開拓する事業でも重要な役割を果たす。計画の初めに、ボネ司祭はヴェロニックにダム建設を勧め、運河に沿って美しいポプラを植えるとよいと忠告する。「水が露をもたらし、それが土を肥やし、その土でポプラが育ち、霧が流れていくのを食い止めてくれます。その霧の成分をあらゆる植物が吸収するでしょう。それが谷間にみごとな植物が育つ秘訣です<sup>11</sup>」と司祭は言う。ホースト・メルテンスも指摘しているように、運河や水路の建設と、そこに植えられたポプラ、家畜、草原と植物が有機的な循環を形成してモンテニャックは変貌を遂げていく<sup>12</sup>。水、霧、木、植物の連携をまず説く役割が司祭に与えられているのは、この小説が標榜する宗教的な射程ゆえだろうが、ボネ司祭がモンテニャック「村の」司祭であることも忘れてはなるまい。ボネ氏は何よりもまずこの村の人であり、土地と環境を読むことができる存在なのである。

アンドレ・ロランは二つの重要な指摘をしている。まずは、「フランス島」のポプラがヴェロニックの罪を見守ったのに対し、モンテニャックのポプラが彼女の贖罪を見守るという点だ。たしかに、ポプラの木の影が罪の場所を示す場面と小説の中で響き合うのは、ヴェロニックが13年かけてユートピアに変えたモンテニャックを死の直前、最後に散歩する場面のポプラ並木であり、どちらも夕日に照らされている。

平原を不均等な大きさの草地に仕切っている灌漑溝に沿って植えられ長い列をなしているポプラの木をとおして、夕日の最後の光が埃をきらめかせ、馬や荷車や男や女や子供、家畜の集団を愛撫するように降り注いでいた。牛番や羊飼いの女が、素朴な角笛を吹いて家畜の群れを呼び集め始めた。この光景は賑やかでいて静寂に満ちていた<sup>13</sup>。

民衆が愛情と感謝をこめてヴェロニックたちに注ぐ視線、その視線を受けるヴェロニックが「自分のいちばん大切な創造物であるこの長く伸びた素晴らしい緑の広がり<sup>14</sup>」に投げかける視線、その連携の先にあるポプラの並木が、

---

<sup>11</sup> Balzac, *Le Curé de village*, op. cit., p. 759.

<sup>12</sup> Joost Mertens, art. cit., p. 421.

<sup>13</sup> Balzac, *Le Curé de village*, op. cit., p. 847.

<sup>14</sup> *Ibid.*, p. 848.

土地再生計画の総括とも言えるこの光景の軸となっている。「フランス島」のポプラは夕日を受けて罪の場所を示したが、ここではポプラの葉が夕日を濾し、きらめく埃をとおして、ヴェロニックの贖罪の事業の成果を象徴する満ち足りた人間や動物に降り注いでいる。光を濾し、遮りながらも通過させるものは、それが植物であればなおさら「その場、その時にしかない」みずみずしい感覚と小説的な詩情を生み出す<sup>15</sup>。

さらにポプラについてアンドレ・ロランは次のような指摘をしている。ボネ司祭がヴェロニックにポプラの植林を勧める箇所と似た言葉が、神の言葉の芽を人間が枯れさせてはいけないという文脈で語られているサン・マルタンの *L'Homme de désir* に照らして読めば、水と光、空とつながって大きな森を形成することになる木の芽は、同じく茂り、伝えられていく神の言葉を喻えているという<sup>16</sup>。ただしアンドレ・ロランはまた別の機会に「司祭の考えでは、ヴェロニックの『活動的な贖罪』は罪ある恋の過去と切り離されなければ完全なものになりえない<sup>17</sup>」にもかかわらず、ヴェロニックにはそれが不可能であったことを指摘し、ポプラから始まって大きな森を茂らす計画の反宗教的な性格を暴いている。「ポプラ *peuplier*」の語源であるラテン語 *populus* は人民、共同体を示す。ヴェロニックは、タシュロンが死刑に処せられた後、「庶民の出である私は庶民に戻りたいのです<sup>18</sup>」と述べ、自分の絶望を、恋人の故郷を変貌させる力へ変えようと努める。モンテニャック改造計画の要となる水路の両側で、『ポールとヴィルジニー』のココヤシやパパイヤほどではなくとも成長が早いポプラは、主人公に残された限られた時間の中で目に見える土地の変貌をうながし、共同体の再生を実現することに貢献した。それはヴェロニックの考える愛の言葉を、一部のポプラの木が象徴する「勇氣<sup>19</sup>」をもって土地に託し、土地に書きつけることでもあった。

---

<sup>15</sup> 植物が濾す光については次の拙論でも考察した。博多かおる「花を描くこと、造花づくりにおける隣接、詩情の浸透あるいはリサイクル—ジョルジュ・サンド『アントニア』をめぐって」、上智大学文学部フランス文学科『仏語・仏文論集』55・56号、p. 101-123。

<sup>16</sup> André Lorant, « Notices » du *Curé de village*, *op. cit.*, p. 1599.

<sup>17</sup> André Lorant, « Balzac et le temps de la mélancolie dans *Le Curé de village* », *L'Année balzacienne*, 2007/1 (n°8), p. 174.

<sup>18</sup> Balzac, *Le Curé de village*, *op. cit.*, p. 747.

<sup>19</sup> L. D\*\*\*, Botaniste, Coloriste, etc., *Le Langage des plantes, des fleurs et des couleurs, ou dictionnaire complet des plantes, fleurs et couleurs symboliques*, 182, Rue Montmartre, Paris, 1821, p. 18. 他の書によれば *peuplier tremple* は嘆きを、*peuplier blanc* は良き時間の使い方を、*peuplier noir* は勇気を表す (*Langage des fleurs, dévoilé et expliqué au moyen de l'interprétation symbolique des plantes, fleurs, fruits, etc.*, Le Bailly, Paris, 1858)。

『村の司祭』のヴェロニックと似て、恋人を死なせた過去をもつ医師ベナシスがグラン・シャルトルーズに近い村の環境を変えていく『田舎医者』でも、ポプラ並木は彼の成し遂げた仕事の軸として現れる。グルノーブルに通じる眺望は次のように描かれている。「高さ 60 ピエの緑の斜面が庭園の小道のように盛り上がった幅広い道を見渡すかぎり縁取り、それを創造した者が誇りに思っているべき自然の記念物モニュメントを構成していた。刈り込まれていない木々はこぞって巨大な緑のシュロの葉をかたどっていた。そういうイタリアのポプラはもっとも見事な植物の一つだ<sup>20</sup>」。ポプラの蜜やカラマツの脂べになどの香りも協力し、植物は都会の人間には想像もつかない感動を与え、自然への愛が喜びの感情をかきたてる。ベナシスは 10 年育った見事なポプラを誇りにし、人にけっして幻滅を与えず、神々しい感情さえ感じさせる樹木を讃える。『村の司祭』においても『田舎医者』においても、整備されていく土地の流通の要となる道を縁取るポプラは、水や空と協力して自然の循環を支えている。また土地の変化と共同体の再生を象徴し、それを見つめるものに喜びや人間を超えた力への賛嘆を引き起こす装置となるべく配置されている。

## 2. 植物の詩情と再生の力

モンテニャックの教会は、フランスに数多くある貧しい教会の中でももっとも貧しい教会とされ、素材は砂利と漆喰で、大きな納屋に似た粗末な作りである。ところが自然がそこに比類なき美と詩情を与えている。教会の外観は「もっとも豊かな〈彫刻〉、といっても光と影が外側を豊かにし、ミケランジェロと同じくらいその道に通暁している〈自然〉の手が彫り、寄せ集め、彩った〈彫刻〉で飾られていた<sup>21</sup>」と描写されている。この上なく優れた彫刻家にたとえられる〈自然〉が、草や花、つる性の植物の多様な線やかたち、凹凸や異なった艶、色彩でこの貧しい教会の壁面を飾り、光と影が輪郭に奥行きを与え、日光の角度によって変化する趣が生まれる。教会の内部に通ずる窓は「青いつりがね草に覆われたポーチの上の薔薇型の窓は、見事な絵に彩られたミサ典書のはじめのページのようなだった<sup>22</sup>」と描写されている。光は、絵に彩られた祈りの書に入っていくように、自然の花に縁取られた窓か

---

『田舎医者』で述べられているイタリアポプラは *peuplier noir* の一種であり、街路や広場を囲むためにしばしば植えられた。

<sup>20</sup> Balzac, *Le Médecin de campagne*, dans *La Comédie humaine*, éd. cit., t. IX, p. 488.

<sup>21</sup> Balzac, *Le Curé de village*, op. cit., p. 715.

<sup>22</sup> *Ibid.*

ら祈りの場に入っていくのである。植物に縁取られた窓のガラスに濾された光が、書物の敷居をまたぐ越境のイメージを重ねて教会に入っていく。それによって、教会は周囲と異なった詩情をまとった一種のヘテロトピアになる。

教会内部が殺風景だと非難したラスティニャック神父に対し、ボネ氏は特別な催しの際には信徒たちがあふれるほど花束を飾ってくれるのだと言い、「あなたの目には非常に殺風景に見える私の教会が、花嫁のように装い、芳しく香るのです。床には葉の茂った木の枝を敷き詰め、その真ん中に聖体秘蹟の通路として、葉をとった薔薇の花の道を残しておくのです<sup>23</sup>」と述べる。ローマのサン＝ピエトロ寺院を飾る黄金にも恥じない豊かな植物の息吹が、殺風景な空間を非日常的な空間にし、その時、その場にしかない詩情を生み出す。素朴な飾らない心を反映する身近な植物が、「現実の他の空間とどこか〈絶対的に異な〉り、他の空間と対立し、他の空間を消し去ったり、補ったり、色褪せさせたり、浄化したりする<sup>24</sup>」とミシェル・フーコーが定義したヘテロトピアにもなぞらえられる空間を出現させるのである。

司教館もまた同じ砂利と漆喰の建物で、周囲には野生の植物が石の存在を忘れさせるように茂っている。テラスでは「多様な種のイラクサやカミツレや「ビーナスの髪」と呼ばれる植物が、厚いのひび割れている排水溝から多様性あふれる茂みになって生え出していた。植物学がそこに、ぎざぎざの歯をしたシダや、黄色の雌しべをもつ紫がかかった金魚草や、褐色の隠花植物などのこの上なく優雅なつづれ織りを投げかけていた。そのため、石は付属物のように見え、この新鮮なつづれ織りにほんのところどころ穴をあけていた<sup>25</sup>」。これは『ラ・プレス』版の最初の校正で追加された部分にあたり、続く校正の中でも細部が変更されている。シダの「褐色」という色、「そのため、石は付属物のように見え」以降は二度目の校正で付け加えられ、自然のつづれ織をなげかけた主語になっている「植物学」はもともと「自然」だったものが1845年にフルヌ版上で訂正された。つまりバルザックはこの部分にこだわりをもって植物の種類を書き加え、「植物学」の凡庸でも詩情漂う一頁のように仕立てたのである。また石と植物の関係を考察し、石を脇役にしてしまう植物の力に目を止めさせようとしたことがわかる。

---

<sup>23</sup> *Ibid.*, p. 727.

<sup>24</sup> Michel Foucault, « Les Utopies réelles ou lieux et autres lieux », dans *Œuvres*, Gallimard, coll. « Pléiade », t. II, 2015, p. 1239.

<sup>25</sup> Balzac, *Le Curé de village*, *op. cit.*, p. 712.



ここに現れる「ビーナスの髪 *cheveux de Vénus* は、シダ植物の一種にも、ランキユラス科の植物にも使われる呼び名だが、『海辺の悲劇』でもバルザックはカミツレとともに登場させており、そこでは「山の花々が注意を引きつけた […] 窪地はその時、貧しい食生、暖かい色のカミツレやピロードのような葉をした〈ビーナスの髪〉に彩られて美しかった<sup>26</sup>」と描写している。『ウージェニー・グランデ』には「鳩の喉のように変化する色の茂った葉をもつ〈ビーナスの髪〉」が垂れ下がる壁が描かれている<sup>27</sup>。ウージェニーが櫛けずる髪との関係も考慮すれば、垂れ下がるシダ植物が想像されている可能性が高いだろう。アンドレ・ロランも『ウージェニー・グランデ』の主人公が不安と恋の希望を胸に、この植物をソーミュールの家の壁に眺めることを指摘し、「『村の司祭』では、壁の裂け目に生え出た花は無垢と純粋さを、銀行家グロステートの温室で手折られた花はグララン夫人の満たされない官能を表す<sup>28</sup>」と述べている。葉をしげらせ伸び続けていく野生の植物は、温室で育てられた植物と対比され、手つかずの無垢だけでなく、人間の創意と無関係に誘出する「ありふれたもの」の詩情を伝えている。

伸びていく植物について、『村の司祭』では「雑草の蔓草が勢いよく生え出た壁の亀裂を飾っている植物の優雅な趣や、巻きひげのある若枝や小さな房が、朗らかな想いを運び込むかのように窓から入り込んでいる葡萄棚<sup>29</sup>」などが若きガブリエル・ド・ラスティニャック神父の視線で観察されるのだが、彼ははじめその光景に少しも心を奪われず、「将来司教になれる身分であることを幸せに思った<sup>30</sup>」とされている。『ゴリオ爺さん』で南からパリ社交界に上りやがて政治家となる兄と似た現実的な野心を胸に、神父は風景と距離を置く。この箇所も校正で書き足され、植物の種類が変更され描き込まれていった。作家自身が場面を彫刻し、細部に緻密な彫りを施したわけである。水や空気や光を吸いこみ、代わりに匂いや息吹や詩情を返してくれる多様な植物で場を埋めていくことで、小説の空間は独特な呼吸を始める。しかも壁の亀裂から生え出て上に伸びてゆく蔦や窓から入り込む枝など、屈託

---

<sup>26</sup> Balzac, *Un drame au bord de la mer*, dans *La Comédie humaine*, éd. cit., t. X, 1979, p. 1162.

<sup>27</sup> ランキユラス科の「ヴィーナスの髪」はふんわりした細い葉の中にモーヴ色の花を咲かせる植物だが、「ピロードのような葉」としていたり葉の色が変化したりする「ヴィーナスの髪」はホウライシダ科の植物を指しているのかもしれない。

<sup>28</sup> André Lorient, « Notices » du *Curé de village*, op. cit., p. 1579.

<sup>29</sup> Balzac, *Le Curé de village*, op. cit., p. 713.

<sup>30</sup> *Ibid.*

なく敷居を超えていく植物に焦点が当てられていることが興味深い。「いつも開け放たれているこの家は、誰のものでもあるかのようだった<sup>31)</sup>」という言葉は、万人に対してこの司祭館が開かれていることを示し、植物はこの開かれた状態を象徴している。また植物が境界を越えていくところに越境の詩情が生まれる。司教館のテラスに面した窓にも白いクレマチスが活けられ、片方にはジャスミン、もう一方には金蓮花が伸び、葡萄棚の赤く色づいた葉が、彫刻家も表現することができなかつたような縁飾りを添えている。「葉のぎざぎざした形に切り抜かれた光が、そこに優美な趣を与えていた<sup>32)</sup>」と語り手はつけ加えている。光を切り抜くこともまた、光を越すことと似て、平面を分割し次元を増やすことだ。小説空間はその刹那に生まれる次元に読者を招き入れる。そうした細部は協力して、村と谷間、川を眺めながらラストニャックが突然その想念に異変をきたして理解したような、「聖書の素俗さへと立ち返る生活<sup>33)</sup>」、この貧しいが隅々まで配慮の行き届いた住まいにたちこめる、内と外が循環し随所で想念が静かに呼吸するような詩情を形成している。ここでも植物は、足を踏み入れた人間の感性や思考に変化をもたらし、読者にも異なる光のもとに空間を見せるような小説的ヘテロトピアを形成することに協力している。

その光景の中で石が植物の付属物のように見えることはすでに見たが、植物の力は石との関係でさらに強調されている。バルザックの『ベアトリクス』では土地の人々の生き様を語り、『コルネリュス卿』で視線を放つ石は、ここでは植物に覆われ沈黙している。司祭館の前でも「すぐには感じられないが執拗な植物の力によって階段の石がずれ、そこから背の高い草や野生の草花が生え出ている<sup>34)</sup>」と『村の司祭』の語り手は述べる。ジャン＝ピエール・リシャールはジャック・レダの詩集『土手の草』*L'Herbe des talus* を読み解きながら、「草の生来の性質が、中断をめぐるあらゆる問題系から草を遠ざけるように思われる」と書いている<sup>35)</sup>。アラン・コルバンもこの書に触れ、「時代の流れの中で、作家たちは絶えずさまざまな道徳的価値を草に与えてきた

---

<sup>31)</sup> *Ibid.*, p. 713.

<sup>32)</sup> *Ibid.*, p. 728.

<sup>33)</sup> *Ibid.*, p. 714.

<sup>34)</sup> *Ibid.*, p. 712.

<sup>35)</sup> Jean-Pierre Richard, *L'État des choses. Études sur huit écrivains d'aujourd'hui*, Gallimard, 1990, p. 36.

が、中でも際立つのは粘り強さ、エネルギー、生え出る力である<sup>36</sup>」と指摘した。『村の司祭』でも草は、いつちぎられるともわからない反面、沈黙のうちに、すぐには感じられないが持続的に働きかけて石をも動かす力、決して諦めず途切れることのない力を示しているだろう。

さらに、モンテニャックの教会に生える草は、この教会が守り、育んできた人々と無関係ではない。司教館の壁の間から生え出ているイラクサについて、アラン・コルバンは福音書において雑草、特にドクムギが非難されていること、ヨーロッパにおいてその嫌悪が野蛮に対するものであることを述べている<sup>37</sup>。ただしコルバンも引用しているユゴーの『静観詩集』の詩句で、社会の周辺部に追いやられた人々をそこに重ねて表明されているイラクサへの共感が、雑草を生えたままにするボネ氏の感覚に近いだろう。ユゴーは「わたしは蜘蛛が好きだ、イラクサが好きだ／人に憎まれているからだ／ […] 呪われ、かよわいからだ／這い上る黒い存在たちが […] / 待ち伏せて自ら罠にかかる哀れな存在だからだ／ […] 通りがかりの人々よ、しがない植物にお情けを／哀れな動物にお情けを<sup>38</sup>」とうたっている。これらの詩句に表れた、社会に排除され、憎まれ、つまらないものとされ、踏みつけられる存在は、「行政に顧みられず、貴族に見捨てられ、産業に排斥された<sup>39</sup>」モンテニャックの土地とその民を彷彿とさせる。罪人として辱められ根こそぎにされたダシュロンの立場もイラクサのそれと重なる。

モンテニャックの教会の裏の墓地で、雑草に覆われた小山の上に立っている朽ちた十字架、崩れた残骸が肘の高さほどまで積み重なった塀には廃墟の趣があり、ナヴァラン家の城の廃墟が司祭館と教会を見下ろしている。ジャン＝ピエール・リシヤールはやはりレダの作品を論じながら草と廃墟の深い関係を指摘し、「草は隠さねばならないもの、ラミューズが『下にあるものの強烈さ』と呼んだものを覆い、隠すが、同時にそれを顕然させ、それらが語るに任せる。草はたとえば、消去や忘却の力をもつが、いつでもその中に青々と蘇らせる思い出、忘れられたものになんという新鮮さを与えることか……<sup>40</sup>」と書いている。アラン・コルバンもこの箇所に触れた上で、フロー

---

<sup>36</sup> Alain Corbin, *La Fraîcheur de l'herbe. Histoire d'une gamme d'émotions de l'Antiquité à nos jours*, Arthème Fayard / Pluriel, 2019, p. 12.

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 24-25.

<sup>38</sup> Victor Hugo, « J'aime l'araignée et j'aime l'ortie », dans *Les Contemplations*, dans *Œuvres poétiques*, éd. Pierre Albouy, Gallimard, coll. « Pléiade », t. II, 1967, p. 611.

<sup>39</sup> Balzac, *Le Curé de village*, *op. cit.*, p. 706.

<sup>40</sup> Jean-Pierre Richard, *op. cit.*, p. 23.

ペールのルイズ・コレ宛の手紙を引用している。そこでは、誰かが夢を刻みつけた石の上に咲く花や石化した頭蓋骨の中に生える草に、生命と永遠の摂理が読み取られる。『村の司祭』でも廃墟のもとにあり廃墟のような墓地を覆う草は、隠しながらもその下にあるもの、死者の身体と記憶を指し示し、草と同じように軽んじられ、憎まれ、社会の片隅に追いやられた人々を思い出させる。石は記憶を抱き抱えているが、草は石をずらしながらその記憶を問題に付す。石と草の関係は、過去を抱え動かないものと新たに伸び出ていくものの関係を問う。それはまさにヴェロニックの心理に潜み、土地再生に誘う二つの痛みだ。小説の後半でタシュロンはこの墓地に眠り、ヴェロニックの館の見晴らし台から墓地が見下ろされる。ヴェロニックの視線によって、思い出の青々とした力がどれだけの苦悩と生々しい傷を表現しうるか、暴かれるだろう。その意味では草の粘り強さと過去を忘れない力が、1839年には企図されていなかったほど1841年のテキストを延び広がらせたとも言える。

下にあるものを隠しつつも語らせ、思い出させるだけでなく、植物はそこに新たな命を育む。モンデニャックの教会を覆う木蔦は「『歲月』が自分の与えた傷を覆い隠すためになげかけたマントー<sup>41</sup>」とされ、囀る小鳥をかくまって、木が痛みを治癒し、はかない生命を守ることを示している。人体標本に見られるのと同じくらい無数の脈を蔓が描いている描写から、蔦の蔓が人間の血管に重ねられていることがわかる。テキストが自ら説明しており、希望を表すアーモンドの木が壁の亀裂から生え出ている。教会の背後に生える松は「避雷針」の役割を果たしているとされ、災いから人々を守る力を示唆している。墓地の鉄の十字架には、復活祭で清められた柘植の木が添えられている。キリストが受難の前にエルサレムに入った日、「棕櫚の日曜日」に由来する柘植<sup>42</sup>は、復活と再生への希望を表す。樹木と草がこの場面で表すのは、もっともかよわく、排除された者たちにもかけられる、けっして諦めることのない愛、守り、再生の希望であり、傷を下に隠しながら弱まることのない忍耐強い力である。加えて、そこには血のイメージをはらんだ命の連続性と再生の概念が潜んでいる。

しかしこの小説で、何が「再生」しうるのだろうか。ヴェロニックが望んだようにタシュロンの名誉だろうか。死を前にしたヴェロニックの告白は、タシュロンの犯した殺人に予謀がなかったこと、不幸な偶然の結果だったこ

---

<sup>41</sup> Balzac, *Le Curé de village*, op. cit., p. 715.

<sup>42</sup> 棕櫚から柘植をはじめとする木に変化したのち、聖別された柘植を持ち帰ることが受難を経たキリストの復活を信じることにつながった。

とを示すことでタシュロンの名誉を回復できたのだろうか。または、再生するのはヴェロニックの心だろうか。彼女はタシュロンを愛したことを悔い改めはしない。あるいは、再生するのは土地が不毛で貧しいがゆえに犯罪率の高かったモンテナックの村だろうか。こうした問いに一つの答えを与えないまま、小説の後半は再生の概念とそれにまつわる感情を考察しているように思われる。

### 3. 苦しむ木、語りかける木

上で見たように小説の前半ではモンテナックの教会と司祭館で植物が教会と司祭館を特別な場とするさまが語られ、草がその下にあるものを粘り強く指し示し、木が再生の希望を分かち持っていた。しかしすでにそこには、病み、苦しむ木の姿もあった。司祭館の葡萄の葉は全体に病気にかかって斑点に覆われている。貧しく、犯罪者を多数生み出していたモンテナックの村は聖職についたばかりのボネ氏にとってすぐさま「自分の葡萄畑<sup>43</sup>」となり、社会を苦しめている病に対する彼の態度は、「物悲しい泣き言を並べてその災いを広げる代わりに、各人が仕事に取りがかり、一介の労働者として神の葡萄畑に入っていくべき<sup>44</sup>」という言葉に表されている。そのことからすると葡萄の病は、司教区の人々にのしかかる社会的な問題と重なる。1841年のテキストで司祭の前に現れるヴェロニックもまた「病んだ魂<sup>45</sup>」を抱えており、ボネ氏は神に対してその責任を負っていると言う。

思い返せばヴェロニックを恋に誘った熱帯の花も、苦しみや死の概念と無縁ではなかった。求婚者グラランは銀行家グロステートの温室からそれらの花を運んできたのだが、ヴェロニックはグロステートへの手紙で「誰にも香りを嗅がれることもなく、あなたの森の中で生まれては枯れていく<sup>46</sup>」すばらしい花々のことを考えずにはいられないと述べている。熱帯の花は一方では甘美な世界へ誘うが、他方では一時的に咲かされてもすぐに絶える命がその中に感知されていた。ヴェロニックは当時リモージュで個人的に行っていた慈善行為についても「わたしの温室の中にあるものといえば、みな苦しんでいる魂ばかり<sup>47</sup>」と述べ、その場で貧者に足りていないものを与えるだけ

---

<sup>43</sup> Balzac, *Le Curé de village*, *op. cit.*, p. 732.

<sup>44</sup> *Ibid.*, p. 728.

<sup>45</sup> *Ibid.*, p. 754.

<sup>46</sup> *Ibid.*, p. 670.

<sup>47</sup> *Ibid.*, p. 671.

では不十分であることを告白している。ヴァンサン・ビエルスによれば、バルザックは「博愛 *philantropie*」を「慈善 *charité*」と対立した概念と捉え、批判し続けた。「なぜならそれは自己愛でしかなく、宗教に根を張っておらず、効率が悪いからだ<sup>48</sup>」そして『現代史の裏面』や『村の司祭』が示す通り、バルザックの描く 19 世紀社会において教会はもはや単独で効率的な活動ができず、非宗教的な組織の支えを必要としているとビエルスは指摘する。リモージュにおけるヴェロニックの施しを通して不毛な慈善が嘆かれ、小説後半で科学と宗教と金銭が手を結んで行うモンテニャック再生はその欠点を克服する。グロステートの園芸の趣味はそこで、ユートピア創設に植物の種を供給することで現実的な徳行に参加する。罪の種をまく芳しい花という小説的な「種」もまた、贖罪の物語へと回収されていくわけだ。

司祭はモンテニャックの森を眺めながら、森を社会にたとえつつ、木の苦しみ、病をヴェロニックに語る。「この森と社会生活との間には、漠然とした類似関係があると思いませんか。それぞれに固有の運命があります。あの木の集合の中にどれだけの不平等があることか！ 一番高いところにある木ほど腐植土と水を欠き、初めに死んでしまうのです<sup>49</sup>」。森を社会に重ねて両者の中にある「不平等」が語られる。これに対してヴェロニックは「薪を作る女の鉋で、美しい青春の盛りにたち切られてしまう木もあります<sup>50</sup>」と答える。鉋という言葉を通じて、青いまま断ち切られる植物と、断頭台の露と消えた若きタシュロンが重ね合わされている。鉋を操るのがヴェロニックとなれば、共犯でありながら恋人を見殺しにした自分自身への深い皮肉のこもった非難が、社会となれば死刑制度と司法を操る人間の残酷さがあらわになる。植物とそれを刈るもののイメージは死を前にした告白でも用いられ、そこでヴェロニックは「若い花の盛りにもぎとられたあの命<sup>51</sup>」という言葉で死刑になったタシュロンを指している。

『村の司祭』の皮肉は、物語を死から再生へと展開するのが、そのように病み、刈られる姿を晒し続ける植物である点にも表れている。愛人を断頭台にかけられ、心を閉ざしたヴェロニックの麻痺した心と呼び覚まし、「わたしたちの心もまた耕されなければならない<sup>52</sup>」とヴェロニックに確信させる

---

<sup>48</sup> Vincent Bierre, « La charité à l'épreuve du roman balzacien », *Romantisme*, n° 180, 2018, p. 33.

<sup>49</sup> Balzac, *Le Curé de village*, *op. cit.*, p. 758.

<sup>50</sup> *Ibid.*

<sup>51</sup> *Ibid.*, p. 869.

<sup>52</sup> *Ibid.*, p. 763.

のは、水の無い箇所では枯れている森の言葉、それが与える感覚、独特な感動だった。

精神が教養に満ち、心に痛手を負った人たちの中で、森を散歩しながら森の言葉を聞かずにいられる者があるだろうか？ 心を慰撫するような声、あるいは恐ろしい声が、そこから立ち上ってくるが、大方は優しい声だ。もし、わたしたちの心をとらえる、厳粛で素朴で甘く神秘的な感動の原因を探すなら、これらすべての被造物が、自分の運命に従い、不動でじっと服従している崇高で創意に富んだ光景のうちにその理由を見出すことができるだろう。 […] こういうわけでヴェロニックは、自分でその夜ボネ氏に話したように、この山の峰の澄んだ静けさの中から、森林の漂わず香の中から、大気の澄んだ穏やかさの中から、神の慈悲についての確信を受け取ったのだった<sup>53</sup>。

アラン・コルバンは、神の世界の反映と捉えられ、14世紀ごろまでは感覚世界の表現とは見なされていなかった樹木に対して、自然神学が「自然のスペクタクルの美しさの中に表れたままの神を歌うよう<sup>54</sup>」誘ったことを指摘し、「もちろん宗教的な次元での樹木の読解や、樹木がかき立てる感情の肌理は、そのような経緯に関係している<sup>55</sup>」と述べている。さらにロマン主義的な庭において「聖なるものの痕跡がもっとも深く刻まれているのは森<sup>56</sup>」だと述べ、ロマン派に至る文脈で、木が語る言葉がしばしば問題にされたことも指摘している。『村の司祭』でヴェロニックの心理の転換点となるこの場面においても、動くことができないまま苦しみを受け入れて立ち尽くす木々が、森の言葉を聞き取り「厳粛で素朴で甘く神秘的な感動」を得る契機を人間に与えている。死んだ恋人の墓の傍で生き続けなければならないヴェロニックの自己破壊的な苦しみは、森の言葉という、コルバンによれば西洋文化が変奏しつつ伝えてきた紋切り型を借りつつ、生産的な祈りに変わっていく。モゼ氏が指摘するように<sup>57</sup>、ボネ氏の役割が1839年版『村の司祭』にくらべて小さくなっている1841年以降のテキストにおいて、静寂、香りも含めた「森の言葉」は「教会の言葉」を補うのである。

---

<sup>53</sup> *Ibid.*, p. 762-763.

<sup>54</sup> Alain Corbin, *La Douceur de l'ombre. L'Arbre, source d'émotions, de l'Antiquité à nos jours*, Flammarion, 2020, p. 87.

<sup>55</sup> *Ibid.*

<sup>56</sup> *Ibid.*, p. 88.

<sup>57</sup> Nicole Mozet, *Balzac au Pluriel*, PUF, 1990, p. 196.

だが「ユートピア」に変貌させられたモンテニャックにも、植物をめぐる残酷なイメージは潜んでいる。そこで動物は草を喰み、「男や女や子供が、田園のいちばんすばらしい仕事と言える草刈りの仕事を終えようとしていた。雷雨で急に冷やされ生き生きとした夕方の空気が、刈り取った草や、束ねた干草の滋養ある香りを運んできた<sup>58</sup>」と、夕方の光景が描かれる。冷えた空気、干草の香りと、干草の山の上で戯れる子供たちの叫び声が混じるこの場面には、アラン・コルバンが『草のみずみずしさ』で指摘した<sup>59</sup>草刈りの動物的な喜びや幼少期の懐かしい記憶があり、干草の山の甘い匂いが与える陶醉もある。だが「刈られる」行為を想起させる言葉が禁句であるこの作品において、草刈りは失われた命と再生を結びつける皮肉をはらんでいるだろう。

死をもたらし再生へ導く木として、当然、十字架の木が想起される。十字架にかけられたのではなく断頭台に消えたにせよ、無念の思いを抱いて命を断ち切られたタシュロンが眠るボネ氏の墓地で、十字架の木は刑罰の道具となった記憶、自らが与えた痛みを持ち続けている。鉄の十字架と朽ちていく木の十字架の併存が断頭台の素材を引き継いでいる。木は再生を願う一方、朽ちていく。アラン・コルバンは「重要なのは、刑罰の道具が命の通った木、生命の木に変身していくプロセスだった[……]早くも2世紀から3世紀には、こうした変化が神父たちによって語られている<sup>60</sup>」と述べ、十字架の木が芽吹く木や緑の木として表象されるようになっていった歴史を追っている。朽ちる木から樹木が、草の下で朽ちていく身体から緑の芽が伸び出るように、小説は傷ついた土地を樹木で覆っていくことでモンテニャックの共同体を再生させ、死を与えられた者を何らかのかたちで復活させようとしている。

#### 4. 亀裂を覆う植物

モンテニャックの土地の変貌は何を再生させたか、させようとしていたか。不毛の土地の再生計画が必ずしもキリスト教的な慈善の行為とはみなせないことを、多くの研究者が指摘してきた。ヴァンサン・ビエルスは「この小説全体の根底に深い皮肉が横たわっている。小説は一人の女性をその善行のために讃えているのにもかかわらず、その慈善行為を通じて彼女はたった一つの目的、見かけより精神的な意味はずっと浅く、逆に利己的な目的を追いか

---

<sup>58</sup> Balzac, *Le Curé de village*, p. 847.

<sup>59</sup> Alain Corbin, *La Fraîcheur de l'herbe*, op. cit., p. 135-142.

<sup>60</sup> Alain Corbin, *La Douceur de l'ombre*, op. cit., p. 81.



けており、それはかつての愛人の名誉回復なのだ<sup>61</sup>」と述べている。彼が指摘しているように、ヴェロニックを「聖女」と呼ぶテキストは複数の読みに開かれ、彼女の行いの二重性によって深い皮肉に満ちる。ヴェロニックは死に臨んでの告白で「わたしは消すことのできない線で改悟をこの土地に書き込みました、それは永遠に残るでしょう<sup>62</sup>」と述べる。これをもとにビエルスは、ヴェロニックの活動的な祈りの目的はタシュロンの名を彼の生まれた土地に刻み込み、それによって彼を復活させることだったと指摘している<sup>63</sup>。

たしかに、『谷間の百合』で死に臨んだヒロインが満たされなかった欲望を悔いる場面としばしば比べられる『村の司祭』の最後の告白で、ヒロインは俗世の愛を語り続けており、彼女の言葉は最前列の友人にしか届かず、共同体の構成員全体への眼差しは欠如している。ヴェロニックとタシュロンの息子がこの土地を継いでいくことのみが示唆され、モンテニャックの村としての将来の展望も乏しい。アンドレ・ロランも「モンテニャックの再生はタシュロンの墓と、墓の中で腐敗していく彼の身体と、自分のおかげで緑になっていく景色の中で自分の灰を愛人の灰に混ぜることしか考えていないヴェロニックの不完全な悔い改めから来ている<sup>64</sup>」と述べ、ユートピア建設のスキャンダラスな性格を暴いている。フィリップ・アモンが言うように『谷間の百合』の谷が女性の身体にたとえられるなら<sup>65</sup>、『村の司祭』の山間は死んだ恋人の身体なのだろう。ひからびた土地に水を流し、そこに生物を生え広げさせる試みは、命を奪われた身体を蘇らせようとする、この小説では生々しい欲望と切り離せない。

小説はタシュロンの処刑から 1830 年をまたいで七月王政期に入り、モンテニャック村再建はそこで行われる。ニコル・モゼやヴァンサン・ビエルスが指摘するように、この時代に特有の金銭の価値や近代的土木技術を動員し、『田舎医者』のそれより近代的で組織的なユートピア建設が語られる。小説は試みの宗教的な射程を強調しながらも、この事業の非宗教的な側面を隠しきれない。不毛の土地を、そこに水を流すことによって再生させる物語は、

---

<sup>61</sup> Vincent Bierce, *Le Sentiment religieux dans La Comédie humaine*, Classiques Garnier, 2019, p. 768.

<sup>62</sup> Balzac, *Le Curé de village*, p. 868.

<sup>63</sup> Vincent Bierce, *Le Sentiment religieux dans La Comédie humaine*, op. cit., p. 774.

<sup>64</sup> André Lorant, « Balzac et le temps de la mélancolie dans *Le Curé de village* », art. cit., p. 174.

<sup>65</sup> Philippe Hamon, « Honoré de Balzac (1799-1850), *Le Lys dans la vallée* », dans *Des Jardins et des livres*, dir. Michaël Jacob, Meistres, 2018, p. 360-361.

宗教的な復活のシナリオや植物の神聖な息吹、朽ちていく十字架が緑の葉をつけるイメージなどを下敷きとしながら、世俗的な愛に必要な血の流れた身体を諦めきれない背徳的な復活の願いの転化でもあった。

ただし、樹木がかきたてる神々しい感情は『田舎医者』から引き継がれ、近代的な土木技術によって作り替えられた村でも、植物は人間の技を超えた「懐かしさ」をかきたて、その感情を宗教的感情に左右されない小説的な詩情に置き換えている。「フランス島」、グロステート氏の温室、モンテニャックの教会などは、小説の中でもそれぞれが独特の情感をたたえるまさに「島」のようなヘテロトピアだった。しかしそこに生える植物は、ひび割れたテキストをつなぐ役割も果たしている。「フランス島」のポプラの影は小説の末尾まで続く推理の中で重要な段階を刻み、複雑なかたちで語られる罪とユートピアの関係性を指し示している。温室の花は『ポールとヴィルジニー』と響き合って、未知の感覚に誘う花の力を示唆し、そこから生まれる犯罪の物語は「種」の主題を介して贖罪の物語へとつながっていく。モンテニャックの教会で希望と再生を示唆した植物は、植物にまつわる刈られるものの苦しみという主題と絡み合って、最後までこの小説のテキストを編んでいる。『村の司祭』の植物は、小説の推理的な面を土地再生の物語につなぎ、物語の精神的な射程と生々しい感覚を結んで、複数の方向へ引き裂かれそうなテキストがはらむ多様な思考を覆いつつ暴いているのである。